

サナギは生きていたんや 社会福祉法人晴朗会 すくすく保育園 [3・4・5歳児]

<事前の環境>数年前、青虫を見つけたことをきっかけに、「園に青虫がやってきた」「青虫の食べ物は何だろう」「保育園にユズの木があったからだ」と興味をもち、園のみんなが学ぶ機会になりました。育てた青虫がアゲハチョウになり園庭に逃がしたことで、「ミカンの木があったら、卵を産みに来るかもしれない」「きっと、アゲハチョウ、生まれた場所に帰ってくるのと違う？」などと考え、ミカンの鉢植えを設定しました。

事例1 期待通り、アゲハチョウがミカンの木の葉に卵を産みつける

園で産まれた卵は、青虫になるまで鉢植えのミカンの木で育てる。子どもたちが登降園時に保護者と一緒に見たり、公園散歩の時にみんなで一緒に見たりすることで、ほとんどの子どもが、「アゲハチョウの幼虫」を知るようになった。

4. 5歳児はしっかり観察し、「白い卵、5ついるよ」「雨が降ったのに、葉っぱから落ちないね」「卵が黒くなった!」「柿色のツノ出したよ!」「今、ウンチ、落としたりよ!」「丸いウンチや!」「葉っぱ、こんなに食べてる!」等やりとりをする姿が見られる。



事例2 アゲハチョウがきた

秋、アゲハチョウが保育園にやってきた。「きっと、保育園で生まれて、お父さんやお母さんになって帰ってきたのや!」と信じている様子が見られた。

子どもや保育者が一緒に、アゲハチョウの羽化を見守ってきた。



ミカンの木の青虫、こんなアゲハチョウになりました。

考察 保育園に、ミカンの鉢植えの木を購入したことから、アゲハチョウが春と秋にやってきては、卵を産むようになった。きっと、お父さんやお母さんになって帰ってくるのだという思いが広がり、アゲハチョウを通して豊かな想像力や観察力が芽生えていることを感じる。

事例3 越冬したサナギは生きていた!「すごい!アゲハになっている!」

園庭のミカンの木に産みつけられたアゲハチョウの幼虫が5匹、カゴの中でサナギになり、そのまま冬を越した。

3月下旬の温かい日、カゴの中のサナギの一匹がアゲハチョウになっているのを見つけた。冬を越せるかどうかは、誰も分からなかっただけに、「うわっ、すごい! サナギは生きていたんや!」と保育園中に喜びが広がった。

5歳児、4歳児、3歳児とみんなが順々に見にやってきた。

「生まれてよかったね!」「長いこと寝ていたの!」「外は暖かいと思って、出てきたのかな!」と、それぞれに思ったことを口々に話す。

「お花の所に連れて行ってあげよう!」との保育者の誘いで、みんなでパンジーの花の上にそっと乗せる。アゲハチョウはじっと動かない。「飛んでいかないね!」「まだ、ここにいたいのかな!」「元気がないのかな!」とアゲハチョウの気持ちに寄り添うような発言が見られる。「お花の蜜を吸ってね!」と声をかける子どもがいる。

最初に生まれたアゲハチョウは、すぐには飛んでいかなかったが、いつのまにか、保育園から姿を消していた。4月に入り、サナギは次々とアゲハチョウになって園から飛び立っていった。「きっと、これから、ミカンの木に卵を産みにやってくるよ!」と保育園中で期待が広がった。



考察 昨年の秋に幼虫からサナギになったままで、アゲハチョウにならない様子を見て、中で死んでいるのではなにかと、誰もが思っていた。しかし、カゴに糸をつけたままぶら下がっているサナギを見て、「もしかして!」「大丈夫かもしれない!」という保育者の提案がありそのまま保存していた。アゲハチョウの生態をよく知り、実際に観察したり触れたりすることによって、体験に基づいた知識—サナギは越冬するのだ—ということが分かり、大きな感動体験となった。

保育者が感動することは、子どもたちの豊かな体験につながることで実感できた。

みどころ

保育園で見つけた青虫に心を動かし、子どもたちはもちろんのこと、保育者が「蝶の来る園にしたい」という願いが貴重な環境づくりにつながっています。子どもたちの気付きや心の動きに寄り添うことを大事にしているので、幼虫やサナギ、成虫にかかわる子どもたちの生き生きとした姿が伝わる事例になっています。